釧路市立北中学校「学校だより」

北　魂

令和６年（2024年）３月11日発行　VOL 50

創造的な場としての学校

釧路市立北中学校長　冨　田　直　樹

先週の５日と６日、公立高等学校の入学者選抜試験が実施されました。自分が希望する進路の実現を目指し、「受検」という試練を乗り越えた３学年の生徒たちの表情は肩の荷を下ろせたという安心感に溢れていました。15日は卒業式です。残された本校での中学校生活を謳歌してくれたらと思います。

さて、先日、今年度最後の校内研修が行われました（「北魂９号」で本校の校内研修の内容を紹介しているので御参照ください）。研修主任の中村教諭が今年度の校内研修の成果と課題、次年度に向けての方向性を示した資料を作成し、全員で今年度の校内研修を振り返りました。１年を通して充実した研修が展開されたと改めて感じることができました。そして、アメリカの作家であるピーター・マイケル・センゲ氏が著した「学習する学校」に記された次の一節を思い出しました。

「学習のための機関は『学習する組織』としてデザインされ、運営することができる。言い換えれば、学校は、命令や指令、強引な順位付けではなく、学習の方向付けを導入することで、持続可能性のある、生き生きとした、創造的な場に変えられる」

学校は、知識や技能、規律を詰め込んだりするだけではなく、「創造的な場」になる必要があるということは、生徒たちにとっても、私たち大人（教職員、保護者、地域住民等）にとっても、重要であり、共通理解を図ることができる考え方だと思います。なぜなら、以前のように、工場や会社でミスなく同じことができ、効率的に仕事をこなす人材を育てることが学校のミッションや役割ではなくなってきているからです。学校はテストをはじめ、減点主義、一つの正解を求めるという文化が一般的になっていますが、その考え方だけではこれからの社会の動きに付いていけないと思います。社会が求める人材像や時代の大きな流れ、それらと学校がこれまで培ってきた人材像や方法論との間にギャップが見え始めているのだとしたら、学校はこれまで以上に「創造的な場に変えられる」ということを改めて考える時期に来ていると考えることができます。

学校が創造的な場に変わっていくためには、何が問題で、何が必要なのでしょうか。ヒントは、上述した「学習する学校」という本のタイトルだと思います。つまり、学校は教職員等が学び合い、切磋琢磨するような「学習する学校」になっていく必要があります。

今年度の校内研修において、「校内授業研究会」や「１人１授業」、「生徒による授業アンケート」、「初任段階教員授業サポート」等が年間を通して実施されました。若手教員は先輩教員の実践から学び、先輩教員も若手教員の実践から新たな気付きを発見し授業改善を進めるなど、「学び合う同僚性」が確実に醸成され、このことが基盤となって「学習する学校」に近付きつつあると感じています。「教師は『教える専門家』であると同時に『学びの専門家』でなければならない」と言われています。次年度も「学習する学校」の実現を目指し校区の小学校と連携し研修を進めていきます。